

3. 先住民族文化交流事業

3-1. 概要

本学の特色として、アイヌ民族・アイヌ文化、さらには世界の先住民族とその文化の研究・教育に力を入れている点があげられることは、これまで随所に述べてきたところである。ここでは、世界各地の先住民族との文化交流事業について言及する。

感受性豊かな世代の学生たちにとって、世界各国の先住民族との交流は、先住民族の歴史や、直面している現実を間近に見聞することで、国際感覚の涵養に資するとともに、人類文化の持つ多様性、豊かさに目を開く貴重な機会である。また、本学に少なからず在籍する、アイヌ民族の血を引く学生たちにとっては、自民族の歴史・文化に類似し共通する側面を多分に有する、世界各地の先住民族と接することは、自己のアイデンティティ形成の根幹にも関わる、きわめて鮮烈で重要な経験となる。そのことは、このような事業に参加した複数の本学卒業生が、アイヌ文化の伝承・普及に関わる進路を志し、アイヌ民族の未来を真剣に考える人材として成長している事実によっても明らかであろう。

本学では、開学以来、海外の先住民族との文化交流事業を随時積極的に行っているが、ここではとくに平成 17(2005)年における北欧のサーミ民族との交流事業と、平成 19(2007)年におけるロシアのサハ民族、ナナイ民族との交流事業について触れたい。

なお、今年度は 8 月末から 9 月初旬の予定で、カナダのモホーク民族との交流事業を予定している。

3-2. 北欧先住民文化交流

本学では、平成 17(2005)年 8 月 15 日～8 月 26 日まで、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構の補助金（海外交流事業）を得て、「北欧サーミ先住民文化交流団」を北欧の 3 か国（フィンランド・ノルウェー・スウェーデン）に派遣した。本事業における行程は以下のとおりである。

- 第 1 日 8 月 15 日 千歳空港 関西空港
- 第 2 日 8 月 16 日 関西空港 ヘルシンキ（同 16 日着）
フィンランド政府教育省訪問・意見交換
- 第 3 日 8 月 17 日 ヘルシンキ ロヴァニエミ
- 第 4 日 8 月 18 日 ロヴァニエミ イナリ
北方圏センター(Arctic Center)訪問
ラップランド大学訪問 レクチャー・意見交換
- 第 5 日 8 月 19 日 イナリ
イナリ・サーミ小学校訪問・意見交換
サーミ教育センター訪問・意見交換
サーミ議会イナリ支部訪問・意見交換
トナカイ牧場訪問
サーミ博物館見学訪問

- サーミ学生・若者たちとの交流・意見交換
- 第6日 8月20日 イナリ カウトケイノ アルタ
サーミ大学訪問・意見交換
- 第7日 8月21日 アルタ トロムソ（バス移動）
アルタ遺跡
- 第8日 8月22日 トロムソ トロムソ大学
学長、学部長・意見交換
サーミ語の授業参観
トロムソ大学博物館訪問
- 第9日 8月23日 トロムソ（バス移動） ナルヴィク ストックホルム
（列車寝台泊）
- 第10日 8月24日 ストックホルム
国立北方民族博物館 訪問
- 第11、12日 8月25・26日（機内泊）
ストックホルム ヘルシンキ 関西空港 新千歳空港

本事業は、北欧のサーミ先住民族との交流を行うことによって、「アイヌ民族の子弟の意識と認識の向上を目的」として行われた。同事業の特記すべきことは、参加者が苫小牧駒澤大学に学籍を置くアイヌ民族の学生たちが中心となっていたこと。そして、彼ら彼女ら自らが主体的に「アイヌ文化学生フォーラム」という組織を設立し、同事業を企画し、実施したことにある。

交流団の構成は、団長として財団法人アイヌ民族博物館館長中村齋氏、本学より同研究所所長村井泰廣教授、及び研究所員 高木良平准教授、学生11人（他大学の2人を含む）、通訳1名、総勢16人が参加した。

参加者全員が、用意周到な事前学習を通してアイヌ文化を身に付け、訪問交流地において、意見交換、踊りや歌、物語などを実演し、サーミ先住民族の青年たちとの交流を実効性のあるものとした。



北欧先住民族サーミの里にて

3-3. シベリア先住民文化交流

本学では、平成19(2007)年8月10日～18日まで、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構の補助金（海外交流事業）を得て、「シベリア先住民文化交流団」をロシア連邦のハバロフスク・ヤクーツクに派遣した。ハバロフスクはアムール川中流域に位置する極東の中心都市であり、ヤクーツクは東シベリアのサハ共和国の首都で、レナ川の流域に所在する。

団長は、本学との間に結ばれた交流協定にもとづいて、財団法人アイヌ民族博物館館長の中村齋氏にお願いした。本学からは環太平洋・アイヌ文化研究所所長岡田路明

教授、副所長蓑島栄紀准教授、学生はアイヌ民族の子弟を中心に 11 人（他大学より 1 人を含む）、駒澤大学附属苫小牧高等学校の生徒 3 人、総勢 17 人が参加し実施された。本事業の行程は以下のとおりである。

- 第 1 日 8 月 10 日 新千歳空港 新潟 ハバロフスク
- 第 2 日 8 月 11 日 ハバロフスク ヤクーツク
市内の史跡等を探訪
- 第 3 日 8 月 12 日 ヤクーツク
サハ共和国の大学・研究機関を訪問・懇談 伝統文化の交流
- 第 4 日 8 月 13 日 ヤクーツク
サハ共和国の文化施設を訪問（口琴博物館等）
- 第 5 日 8 月 14 日 ヤクーツク ハバロフスク
ハバロフスク市内の博物館等見学
- 第 6 日 8 月 15 日 ハバロフスク（シカチアリャン村）
ナナイ民族と交流、学校や遺跡の見学
- 第 7 日 8 月 16 日 トロイツコエ村
ナナイ民族と交流、伝統文化の交流
- 第 8 日 8 月 17 日 ハバロフスク
先住民族文化政策担当者と意見交換
- 第 9 日 8 月 18 日 ハバロフスク 新潟 新千歳空港

多くの場所でアムール川流域の古代・中世文化である靺鞨・女真の考古資料を実見することができた。シカチアリャン村における世界的に有名な岩壁画（ペトログリフ）は、北海道内の余市町フゴッペ洞窟・小樽市手宮洞窟の岩壁画とのつながりも考えさせるもので、多くの学生たちに感銘を与えた。

本事業では、学生・生徒たちも、事前研修で鍛えあげたアイヌ伝統舞踊・歌・口琴（ムックリ）などを披露した。若者たちは、国籍・民族の壁を越え交流した。とりわけ、互いに携帯電話の赤外線通信でデータをやり取りするような場面もあり、サハ民族やナナイ民族にもグローバル化・デジタル化の波が押し寄せていることが実感された。同時に、伝統文化を守り育てていこうとする若者たちが確実に存在することもうかがえた。ただし、ロシア国内において彼ら、彼女らを取り巻く経済状況が決して豊かではないことも随所に思い知らされた。

日本海・オホーツク海を隔てたロシア極東・シベリアには、数多くの先住民族が居住し、独自の文化を育んできた。これらの諸民族の間には、はるか太古から、日本列島、とくに北海道のアイヌ民族との間に、活発な交流が存在してきた。今、若い世代を中心として、この地域を結ぶ交流を再び活性化させることの重要性は疑いない。その意味でも成果の大きな事業である。



ヤクーツク・サハ民族の文化財にて